

論文の内容の要旨

論文題目 文楽人形遣いの動きと呼吸

氏名 渋谷友紀

本論文は、文楽人形遣いの演技と呼吸の関係について考察することを目的とする。文楽は、能楽や歌舞伎と並ぶ日本の代表的な古典芸能である。これらの芸能は、しばしば「型の演劇」と呼ばれ（毛利，1997）、その「型」の獲得のために長期にわたる稽古が必要とされる。しかし、そのようにして獲得されたスキルは、神秘化され、「当の世界の部外者にとっては理解不能」とさえ言われる（生田，1987）。そこで、本論文では、演者や劇評家らが語る「芸談」や「芸論」などで用いられる言葉を手がかりに、それらのスキルを実証的・科学的に理解することを試みた。具体的には、「型」の成立に欠かせない「間」の概念を、身体感覚のレベルで記述した言葉であると思われる「息」ないし「呼吸」を対象とした。以下に各章の内容を記す。

1章では、呼吸と運動の関係に関する研究を概観した。呼吸は、人間の身体的な運動を含む生命活動にとって代謝のためのガス交換として行われることが必須であるが、スポーツなどでは運動の一環として呼吸のタイミングが調整されることがある。たとえば、歩行などのリズムカルな運動であれば体肢運動と呼吸運動の位相が同期し、柔道の投げ技など大きな筋力を発揮する運動であれば特定の動きに特定の呼吸相が合うというような調整が行われている。一方、日本の古典芸能を対象とした研究では、舞台歴の長い演者が、基本的な演技動作を行なった場合、その身体運動と呼吸運動は必ずしも同期的にはならなかった（小林・森下，2000；森田・佐々木，2005）。このことから、森田と佐々木（2005）日本の古典芸能に特徴的な息遣いが存在する可能性を指摘している。しかし、小林と森下（2000）、森田と佐々木（2005）がそうであるように、日本の古典芸能の研究は少数の実験参加者を対象とした定性的な分析になりがちであり、一般性の確保が難しい。そこで、本論文の「研究1」では、先行研究が扱った狂言、歌舞伎とは芸態の異なる文楽の人形遣いを対象に、より実証的な分析を行なうことを目的とする（詳細は4章）。また、研究1の結果、文楽の人形遣いにおいても、狂言や歌舞伎と同様に、舞台歴の長い演者が、基本的な演技動作を行なった場合、その身体運動と呼吸運動が非同期的になる傾向が見られたが、音楽的要素に合わせた場合、呼吸の周期性が低下した。研究2では、この理由を検討することを目的とする。

2章では、そのような特殊な息遣いがある可能性が指摘された日本の古典芸能について、「息」がどのように語られてきたのかを概観し、そのうえで文楽の概要を述べた。日本の古典芸能一般の特徴を表す語として、「型」と「間」があるが、両者はしばしば関連付けてと

らえられる(生田, 1987). 芸を構成する個々の動きを「形」とした場合, それらがまとまって一つのグループを形成したものが「型」とされる(柳, 1972; 服部, 1983; 源, 1989). その「形」と「形」のあいだをつなぐ時間的な間隙は「間」と呼ばれるが(生田, 1987), その時間的な間隙は何もない時間ではなく, 「充実した時間」(源, 1989), 「余情をみる美意識」(南, 2002)があるとされる. 「息」ないし「呼吸」は, その「間」についての身体的な感覚を表現する語として用いられることがある(西平, 2009). さらに, そのような「息」は, 実際の生理的呼吸として, 同じ舞台に立つ他者の演技との関係を作る働きもする(安田, 1984). 文楽は, (1) 人形芝居, (2) 三人遣い(1体の人形を, 指示を出す「主遣い」と, 指示に従う「左遣い」, 「足遣い」の3人で操作), (3) 三業(身体的な演技[=人形遣い]と声を含む音響的演技[太夫+三味線弾き]が別)を特徴とする芸能であり, 狂言や歌舞伎とは異なる芸態であることが分かる. また, 1人の登場人物を表現するのに複数の要素が複雑に絡み合っており, 「間」や「息」が重要になると思われる.

3章では, 以上の2つの章を受け, 本論文の仮説を提示した. 仮説1は, 「舞台歴の長い人形遣い(主遣い)が基礎的な演技動作を演じる場合, その呼吸は, 演技動作とは非同期的な, 比較的一定の呼吸になる」というものである. この仮説は, 4章において, (1) 演技動作時の主遣いの呼吸相と演技動作の対応関係, (2) そのときの呼吸曲線の周期性の検討を通して検証される. 仮説2は, 「人形遣い(主遣い)の呼吸は床の要素に合う」というものである. これは, さらに細かく2つの仮説に分けられ, 仮説2-1「主遣いの呼気開始が太夫の語り始めと一致する」, および仮説2-2「主遣いの吸気開始が無声部最初の三味線の撥音の開始と一致する」として, それぞれ5章で検討される.

4章では, 3章で提示した仮説のうち, 「仮説1」を検証するための実験を行なった. 舞台歴31年と13年の2人の演者に, 浄瑠璃に合わせない課題1「女形の型」, 課題2「立役の型」と, 浄瑠璃に合わせた動作として課題3「お園」(『艶容女舞衣』の部分)を「主遣い」として演じてもらった. 分析は, それぞれの課題に含まれていた「おじぎ」の型の動作時の呼吸曲線について, (1) 「同期性」(「おじぎ」動作を4つの部分に分け, それぞれの部分の開始と呼吸相の関係), (2) 「周期性」(「おじぎ」動作時の呼吸曲線の自己相関)について行なった. その結果, 舞台歴の長い演者は, 短い演者に比べ非同期的かつ周期的になる傾向が見られた. また, 課題3の浄瑠璃に合わせた演技動作時の呼吸の周期性は, 課題1と課題2の浄瑠璃に合わせない単なる型を演じた場合の周期性に比べ, いずれの演者においても低下した.

5章では, 3章で提示した仮説のうち, 「仮説2」を検証するための実験を行なった. 研究2の仮説は, 「人形遣い(主遣い)の呼吸は床の要素に合う」というものであったが, さらに細かく2つの仮説に分けられた. 仮説2-1「主遣いの呼気開始が太夫の語り始めと一致する」, および仮説2-2「主遣いの吸気開始が無声部最初の三味線の撥音の開始と一致する」として, 舞台歴31年, および13年の演者が『艶容女舞衣』の一節で, 「お園」を演じた場面について検討を行なった. その結果, 仮説2-1「主遣いの呼気開始と太夫の語り始めが一

致」は、(1) 舞台歴 31 年の演者は太夫の語り始めに呼気開始が合う傾向が見られ、(2) 舞台歴 13 年の演者は太夫の語り始めに呼気開始が遅れる傾向が見られた。また、仮説 2-2「主遣いの吸気開始と無声部中の三味線が一致」の結果は、(1) いずれの演者も無声部中の三味線に吸気開始が合う可能性が示唆されたが、(2) 舞台歴 31 年の演者は「太夫が息を引くとは限らない無声部」で一致しない可能性があった。

6 章では、追加分析も交えて、研究 1 と 2 を通した総合的な考察を行なった。研究 1 では、呼吸の同期性、周期性に、舞台歴において差が認められ、森田と佐々木 (2005) が主張した日本の古典芸能の特徴は一定程度支持されると考えられた。ただし、それが熟練の差によるかどうかはさらなる検討が必要である。また、課題間での差異も認められた。これらには、演技動作と呼吸のあいだの異なる協応構造がある可能性が考えられた。

また、単なる型を行う場合と、浄瑠璃に合わせて演技を行なう場合とでは、演技動作と呼吸のあいだの結びつきが異なると考えられたことから、研究 2 では、浄瑠璃要素と主遣いの呼吸の結びつきを検討した。その結果、舞台歴の長い演者においては、浄瑠璃要素との関係が無声部によって差があったことから、無声部について調べると、「太夫が息を引く（吸う）と考えられる無声部」が、「太夫が息を引くとは限らない無声部」に比べ有意に長かった。舞台歴の長い演者は、いずれの無声部でも、太夫の語り始めに合うように呼気を開始していたが、無声部中最初の三味線と吸気の開始は、特に「太夫が息を引くとは限らない無声部」において一致しない傾向が見られた。吸気開始から呼気開始までの「吸気に要する時間」を調べると、舞台歴の長い演者は、無声部間に有意な差は認められなかった。しかし、いずれの無声部でも三味線と吸気開始が一致する傾向にあった舞台歴の短い演者の「吸気に要する時間」は、両無声部間に有意な差が認められ、また、無声部の時間との間にも有意な相関が認められた。このことから、舞台歴の長い演者では、研究 1 で見られた呼吸を一定にするという方向性を示しつつ、同時に呼気開始を太夫の語り始めに合わせるなど、浄瑠璃要素に向けた呼吸の調整も行っていることが考えられた。このことは、従来、日本の古典芸能で求められてきた、役者本人と役柄が完全に一体化してしまうのではなく、役者が役とのあいだに一定の心理的ないし認知的な距離を置くことと整合的であると考えられる。

7 章では、総括と結論を述べた。舞台歴の長い演者は、身体運動と呼吸運動のあいだに安定的な関係を作り、特に重要と思われる太夫の語り始めに対してのみ、呼気相の開始を一致させていた。このことは、従来の日本の古典芸能で語られてきたことと整合的であり、それがどのような意味を持つのか、更なる研究が必要である。